

災害被災地におけるスポーツ復興支援活動が参加者に与える影響 —岩手県におけるイベントを事例として—

スポーツビジネス研究領域

5011A031-1 小石原 誠

研究指導教員：間野 義之 教授

I. 背景

2011年3月11日に発生した東日本大震災により、日本は甚大な影響を受けた。被災地域住民の避難生活は長期化しており、また被災地域の復旧・復興にも今後多くの時間が必要とされる。また、東日本大震災の発生は、日本のスポーツ界と国民のスポーツ活動にも、様々な様態・規模で影響を与えた。

人々の身体活動を規定する要因として、環境要因の重要性が指摘されており、災害発生による生活環境の変化は、住民の身体活動・健康にまで影響を及ぼすことが、これまで行われた複数の研究において報告されている。

上記の影響を防ぐために必要な住民の身体運動の活性化の一助として、スポーツ復興支援活動が、東日本大震災後の被災地でも広く展開されている。またこれらのスポーツ復興支援活動に関して、学術的な観点から複数の研究が展開されているが、それらの多くが支援活動を行う側の視点からの事例調査であり、支援活動を受ける側の視点から、その影響を定量的に検証する研究が必要であるといえる。

II. 研究の目的と意義

本研究では、スポーツ復興支援活動において、支援活動を受けた側に与えられる影響についての明示化を行うこと、加えてその影響が災害発生からの時間経過によりどのような変化をするのかを検証することを目的とする。

スポーツ復興支援活動が参加者に与える影響を明示化することで、支援活動の内容検討の際の論拠とすることができる。支援活動を行うに際し重要視すべきである「活動を受ける参加者のベネフィット」を高めるためには、支援活動が参加者に与える影響について、経験則ではなく明確な論拠を持つことが必要であり、本研究により導き出される結果は、論拠構築の一助と成り得る。

III. 研究方法

1. 調査対象

2011年度、2012年度に行われた支援活動「いわてDイベント」を調査体調事例とし、いわてDイベントに参加した被災地域出身の中学生を調査対象者とした。

2. 調査手続き

参加者が①イベントのどのような内容に満足し、②どのような心理的影響を受け、③イベントによりどのような意識変化をするのかを検証するために、以下に挙げる3つの内容を調査項目として設定し、①はイベント参加後について、②と③はイベントの参加前後について、それぞれ回答を得た。

① イベント内容満足度 (10項目：5段階評定)

② 身体運動に対する態度 (18項目：5段階評定)

③ 運動・スポーツ活動への意欲 (1項目：5段階評定)

3. 分析方法

① イベント内容満足度

t検定及び効果量算出により、2011年度と2012年度間の満足度の差異を項目ごとに検証した。また分散分析及び多重比較により、年度ごとにおいてイベント内容に対する満足度の大小関係を項目ごとに検証した。

② 身体運動に対する態度

t検定及び効果量算出により、イベント参加前後の変化を検証し、その結果について2011年度と2012年度間で比較した。また効果量の平均値を年度ごとに算出し比較した。

③ 運動・スポーツ活動への意欲

t検定及び効果量算出により、イベント参加前後の変化を検証し、その結果について2011年度と2012年度間で比較した。

IV. 結果

1. イベント内容満足度の観察と年度間比較

表10. イベント内容満足度の平均値及び標準偏差一覧

No	質問項目	2011		2012		t検定		効果量算出	
		n	平均値 S. D	n	平均値 S. D	t値	有意確率	d値	効果量
1	スポーツ選手の話が聞けたこと	91	4.82 0.49	82	4.72 0.57	-1.30	n.s	0.19	n.s
2	スポーツ選手と会えたこと	91	4.84 0.45	82	4.79 0.49	-0.59	n.s	0.11	n.s
3	スポーツ選手の技術が見られたこと	91	4.70 0.82	82	4.73 0.59	0.26	n.s	0.04	n.s
4	スポーツ選手と一緒に試合したこと	91	3.85 1.53	82	4.55 0.88	3.66	***	0.56	中
5	スポーツ選手からほめられたこと	91	4.24 1.18	82	4.26 1.08	0.08	n.s	0.02	n.s
6	スポーツ選手から指導を受けたこと	91	4.82 0.51	82	4.87 0.41	0.59	n.s	0.11	n.s
7	仲間と一緒にスポーツしたこと	91	4.75 0.61	82	4.74 0.54	-0.04	n.s	0.02	n.s
8	新しい仲間と知り会えたこと	91	4.51 0.90	82	4.40 1.00	-0.71	n.s	0.12	n.s
9	体を動かしたこと	91	4.73 0.63	82	4.70 0.66	-0.31	n.s	0.05	n.s
10	仲間と一緒に試合したこと	91	4.33 1.33	82	4.70 0.72	2.22	*	0.35	小
平均値			4.56		4.65				

***p<0.001 **p<0.01 *p<0.05

年度間比較では、問4, 10の「試合」に関する2項目で、いずれも2012年度の方が、満足度が高かった。

また、問1, 2, 3, 6, 7, 9の6項目で、2011年度と2012年度で共通して満足度が高かった。一方、2011年度では問4, 2012年度では問5が、それぞれの年度内で他の項目よりも満足度が低かった。

2. 体育身体運動態度の変化

表14. 体育身体運動態度におけるイベント参加前後のt検定および効果量算出結果

No	質問項目	2011		2012		2011		2012	
		t値	有意確率	t値	有意確率	d値	効果量	d値	効果量
1	運動のあとは、こころよい気持ちになる。	-5.74	***	-7.04	***	0.51	中	0.84	中
※2	運動をはじめる前になると、「いやだな」と思うことがある。	-4.79	***	-2.08	*	0.33	小	0.19	
※3	運動をしても、少しもおもしろくない。	-1.52		-0.35		0.08		0.03	
4	運動のあとは、なんとなく満足感が残る。	-4.15	***	-4.14	***	0.33	小	0.40	小
※5	運動をはじめる前になると、不安を感じる。	-4.22	***	-3.82	***	0.27	小	0.29	小
6	運動をすることは、実に楽しい。	-5.68	***	-2.01	*	0.33	小	0.18	
※7	運動のあとは、みじめさを感じる人が多い。	-2.12	*	-2.41	*	0.12		0.16	
8	運動ができると思うと、うれしくなる。	-4.54	***	-1.66		0.30	小	0.16	
※9	運動のあとは、なんとなく、さびしさが残る。	1.18		-0.19		0.06		0.01	
※10	運動に使われる時間は、時間の無駄づかいである。	-1.65		-1.53		0.10		0.12	
※11	運動によって友人関係を広めたり、深めたりすることはない。	-0.77		-0.58		0.04		0.05	
12	運動は、気分転換として役に立つ。	-3.19	**	-1.69		0.19		0.12	
13	運動は、協同性の大切さを教えてくれる。	-5.68	***	-4.88	***	0.39	小	0.33	小
14	運動のいろいろな技術を見ておくことは、将来の役に立つ。	-4.99	***	-3.86	***	0.27	小	0.26	小
15	運動は、我々若者にとって学ぶことのできるいいものである。	-4.53	***	-2.06	*	0.25	小	0.16	
※16	運動は、健康な体をつくるための有効な方法とはいえない。	-2.10	*	0.20		0.13		0.01	
※17	運動によって、新しいような動きのできる体を養うということはない。	0.00		-0.68		0.00		0.04	
※18	運動で、忍耐力が養われるということはない。	-1.72		-0.26		0.07		0.03	
d値平均						0.21		0.18	

***p<0.001 **p<0.01 *p<0.05

2011年度では18項目中9項目、2012年度5項目に有意差と有意効果が表れた。2012年度で新たに有意差や有意効果が表れた項目はなかった。また18項目の効果量d値の平均値は、2011年度は0.21であったのが、2012年度には0.18と減少した。

3. 運動・スポーツ活動への意欲の変化

表15. 運動・スポーツに対する意欲の平均値及びイベント参加前後におけるt検定、効果量算出の結果

質問項目	年度	n	参加前		参加後		t検定		効果量	
			平均値	S. D	平均値	S. D	t値	有意確率	d値	効果量
今後、運動・スポーツを行ってきたい	2011	91	4.43	0.81	4.78	0.53	5.25	***	0.51	中
	2012	82	4.34	0.98	4.60	0.86	2.75	**	0.28	小

***p<0.001 **p<0.01 *p<0.05

イベント参加前後の回答平均値を比較した結果、2011年度と2012年度の双方で有意差が見られた。効果量は2011年度で0.51、2012年度で0.28となった。

V. 考察

1. イベント内容満足度の観察と年度間比較

t検定と効果量算出の結果から、震災発生からの時間経過により、参加者が交流試合を楽しむための心理的余裕ができたことが考えられる。多重比較の結果から、参加者全員が体感しやすいイベント要素の満足度が高かったといえる。特に、6項目中4項目がアスリートに関する項目であり、アスリートの参加という本イベントの特色が反映された結果であった。それに対し2011年度と2012年度でそれぞれ満足度が低かった2項目は、いずれもアスリートとの緊密なコミュニケーションに関する項目であり、200名近く参加者がいた今回の対象事例においてはそれが困難であったため、相対的に満足度が低くなったと考えられる。

2. 体育身体運動態度の変化

分析結果から、「アスリートによる災害支援活動が参加者に与える心理的影響は、災害発生からの時間経過とともに減衰していく可能性がある」とこと、「被災地域住民の運動に対する態度が、災害発生からの時間経過とともに向上している可能性がある」という2仮説が考えられる。

一方、5項目について2011年度、2012年度の両方で有意な変化が見られたことは、上述の通り支援活動参加による影響が時間経過につれ減衰していく中でも、少なくとも災害発生から1年半後に行われる支援活動については、参加者に対し有意な影響を与え得ることを示唆している。

3. 運動・スポーツ活動への意欲の変化

分析の結果、増加幅が縮小しているとはいえ、災害発生から1年半が経過した時点においても、アスリートによるスポーツ復興支援活動への参加は、参加者の運動・スポーツ活動への意欲の向上へ一定の影響を与えるといえる。

VI. 結論

本研究の目的は、災害被災地におけるスポーツ復興支援活動が参加者に与える影響の明示化とその時間経過による変化の検証であった。結果、支援活動は参加者の体育身体運動態度を向上させ、かつ運動・スポーツ活動への意欲を向上させること、その向上幅は時間経過とともに小さくなるが、1年半経過時点においては有意な向上が見られることが分かった。今後は長期的な影響の検証、活動内容と影響との関連などの研究が求められる。